令和元年度 あしたのまち・くらしづくり活動賞　主催者賞受賞

メディアから始まるわたしたちのまちづくり

神奈川県横浜市青葉区　特定非営利活動法人森ノオト

森ノオトの活動拠点である横浜市青葉区は、約31万人が暮らすまちです。横浜市の18ある区の中でも2番目に人口が多く、1995年に区ができて以来、人口が増え続けています。公園が多く緑豊かで都心へのアクセスも良いことから、子育て中のファミリー層を中心に年間1万7千人前後の人の出入りがあります（平成30年度）。

ローカルウェブメディア『森ノオト』の発信力

ローカルウェブメディア『森ノオト』を立ち上げたのも、子育て期の一人の女性でした。現理事長兼編集長の北原まどかが、豊かな自然環境を子どもたちの世代に残したい、と地域企業の支援を受けて2009年11月から運営を始めました。地球温暖化への対策を声高に訴えるのではなく、生活者の視点で記事を届けることで自分で選択し行動できる人を増やしたいと考えていました。2013年1月にはNPO法人を設立。暮らしや地域の情報を、エコの視点で発信できる書き手を育てようと、市民ライターの養成講座に取り組みました。地域で子育て中の女性が書き手として加わり、新たなコミュニティを育んできました。

『森ノオト』は、独自の編集方針を持ったローカルなメディアです。自分たちの編集権を守るために、広告掲載に頼らず、「寄付で支えるメディア」として独立した運営を続けています。すべての記事は独自の取材に基づき、毎年約250本の記事を掲載しています。エコロジー、オーガニック、サスティナビリティ、といった方針に沿った地域の情報を集めて発信することで、同じ感性を持つ生活者たちがつながるきっかけをつくってきました。2019年6月末時点で、NPOの正会員、マンスリーサポーター合わせて133人が会員として登録。月間約5万人の読者が訪れ、毎日のように読者から問い合わせや感想のメールをいただいています。

森ノオトの拠点に集う地域の女性たち。ライター、ものづくり、畑、などそれぞれの関心分野を入り口に活動に参加している。参加の形もボランタリーから雇用までさまざま

ライター養成講座を開く

7年間ライター養成講座を重ね、受講生は約100名に上ります。このうち、約50名がライターとして参加しています。デザイナーやフ

新しい拠点の場所のお披露目会をNPO会員に開き、拠点の名前は投票で「森ノハナレ」と命名。森ノオトは、子連れ、家族ぐるみで集えるコミュニティでもある

ローリスト、翻訳家など、様々なバックグラウンドを持つ女性たちが集まっています。ライターはボランタリーな活動ですが、メンバーが事務局スタッフとして運営に携わるようになり、着実に団体として成長しています。

出産、育児期に日本全体で女性の就業率が低下するように、わたしたちの活動エリアでも、妊娠や出産を機に職を離れる女性は少なくありません。森ノオトの活動に主体的にかかわることで、社会とつながるきっかけや自信を得て、新たな仕事に就く人が出てきました。「取材」という行為を、市民が自分の暮らす地域で経験することで、ライター自身の中に多様な目が開かれていきました。市民ライターを養成する講座は、他地域にも広がり、市民活動団体の情報発信の中間支援的な役割も担うようになっています。

衣食住の参加型イベントを企画

ウェブメディアでの発信だけでなく、衣食住の参加型イベントも年間を通じて企画、開催しています。リユースマルシェ、エコクッキング、地産地消、裁縫講座など、2018年は100を超える催しを行い、約4900人が参加しました。

中でも、「あおばを食べる収穫祭」は「地産地消&地域循環」をテーマに掲げ、2013年から毎年11月に開催を続けています。取材を通してつながった区内の飲食店などに声をかけ、地元の商店街と共催で運営しています。約2000人が参加し、リユース食器の使用をルール化することで、出るごみは毎年45リットルのごみ袋1袋に抑えています。

地域の子育て世代の女性たちが活躍

2015年には活動拠点を横浜市青葉区の郊外の戸建てに移し、断熱DIYや雨水タンク、生ごみコンポスト、もちより畑などの、循環型オフィスとして実験中です。このオフィスもまた、メディアとして発信する機能を担っています。

2016年には、ものづくりの事業も始めました。『あおばを食べる収穫祭』でいらない布地をウエスとして集めたことがヒントになっています。使わなくなった布地を回収し、新たなものに作り替えてアップサイクルしようというコンセプトです。アップサイクル、アップリケ、という言葉から発想を得て〈AppliQue〉というブランド名に。プラスチックの買い物袋を減らそうと、エコバッグとして使えるあずま袋を。使い捨ての割り箸やお弁当ケースを使わず、マイ箸・マイお弁当箱を使う人を増やしたいと、マルチクロスやお箸包みを。循環型社会につながるものづくりに取り組んでいます。

作り手となっているのは、地域の子育て世代の女性たち。もともと「森ノオト」の読者で、団体のコンセプトに共感していた人たちが、手仕事の分野に興味を持って参加するようになりました。ここでも、子育て期の女性たちの雇用や地域活動へのきっかけを生み出しています。

この取り組みが新聞社やラジオ局などから取材を受け、全国から寄付布が寄せられるようになりました。「高齢の母が大切にしてきた布です」などと、丁寧にしたためられた手紙が添えられていることが多いのです。環境負荷や作り手の存在をないがしろにした安価な大量生産・大量消費へのアンチテーゼとして、AppliQueの商品が、ものを大切に使い切るメッセージを消費者に伝える役割を担っています。

こうした活動が評価され、まちづくりの協働相手として、行政との協働事業や委託事業も増えてきました。横浜市青葉区とともに2018年度から始めた「子育てツアー」は、子育て世代の転入、転出の多いこの地域ならではの課題解決を目指しています。当事者としての地域での子育て経験と、地域の情報を編集し、届けてきた私たちだからこそ実現できた企画です。「エコ」の枠にとらわれず、複眼的な視点を持ちながら、持続可能なまちづくりに向けて今後の活動も続けていきます。

（特定非営利活動法人森ノオト事務局　梶田亜由美）